OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ジエ・エス・ミルとアルフレッド・マーシャル（一）

大泉行雄

はしがき

此一篇は昨年公刊せられたT. F. Kinloch, "Six English Economists" の第四章ミル論、第六章マーシャル論の邦譯である。經濟學史或は經濟思想史の叙述に、夫れ夫れの時代を彩るべき代表的思想家を捕へ來つて、之に代り談らしむる方法は、從來に於ても試みられて來た。手近に例を求むれば、レヴインスキーの「經濟學の建設者」の如き、プライスの「英國經濟學說小史」の如き、吾が國に於ては河上肇博士の「資本主義經濟學の史的發展」の如き之である。Kinloch の此の書も亦其の企てに於て之等と趣きを一にする。其表題が示す如く英國經濟學の代表者六人を撰んで之が評論を試みたもので、先づスミスに筆を起し、マルサス、リカードー、ミル、ジエヴォンスを經てマーシャルに終る。全卷通じて僅かに七十三頁。僅少なる紙幅の中に、流麗濶達の筆致を以て、諸學者を髣髴たらしめんとする手際は推稱に値する。殊にマーシャルを加へたることが、唯この一事を以ても、up to date の點に於て類書の間に位する理由はあらう。固より斯る小著は深きを求め得べきではない。唯一個の入門書として評價さるべきであることは言ふを待たぬ。

茲に譯載するミル論と、嘗つて公にしたる拙稿「人としてのジョン・スチユアート・ミル」（商學討究第三卷下册）とを併せ讀まるゝ特志家があれば望外の喜びである。

マーシャルに關する著者の叙述は其の主要なる部分を、最近公にせられたる "Memorials of Alfred Marshall edited

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

by A. C. Pigou"（邦譯、マーシャル經濟學論集、宮島綱男氏）に得て居る。從つて、この小篇は右メモリアルへの先達を承るものとして一顧に値しやう。

若しそれ、之等二小篇の譯出によつて、讀者の何びとかゞミルへの興味をそゝられ、或はマーシャルへの傾倒を感じたりとすれば、これによつて譯者の使命は遺憾なく果されたりと言ひ得るのである。

ジヨン・スチユアート・ミル

一

「其の智力の旺盛にして且つ透徹せる點に於て、彼は人類思想史上、殆ど其の類を見ず」。之はジヨン・スチユアート・ミルが、其の父を叙述するに當り用ひた言葉である。此の言葉が、縱し批評家としての彼の才能を高く評價せしめることは無いとしても、少くとも彼が、斯くも惜し氣なき稱讃を與へた其の人に就ての興味は惹き起される。ジエームス・ミル（一七七三――一八三六）は蘇格蘭人で、其地の教會の牧師として教育せられた。天資冷靜にして鋭鋒、而も想像力と同情心に乏しかつた彼は、牧師としての經歷を踏むことを抛つたことは、教會の爲めにも亦彼自身のためにも共に好都合であつたのだ。東印度社會に奉職し、「檢閲官」に昇進したが之は年俸二千磅を與へられる印度政廳の主要なる官吏であつた。彼の最大の著作は「印度史」(History of India, 1817) であるが、其の「經濟學綱要」(Elements of Political Economy, 1821) 及び「人間心理の分析」(Analysis of the Human mind,

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

1829)は極めて重要なものであり、大英百科辭典に寄稿された政府論は「哲學的急進主義者」の教典となつたものであつた。彼は一八三二年にその最高調に達した選擧法改革運動の速進に努力し、又マンチエスターやバーミンガムの如き工業中心地に住む中産階級の上に影響を及したと云はれて居る。然れども、人生の神秘に就て何等の感情も持たず、その倫理學及び心理學上の理論は、眞理と稱するには餘りに單純であつた。純然たる無神論者であつた彼は、すべての感情を攻難し、詩歌をば尻目にかけた。「彼はその顏に假面をかぶつて居た」(ベンザム)、「彼は自分の教義について、獨斷とも云ふべきものを固持して居た」(ブラハム)、「彼は人間中での最も氣短かな人であつた」(ジエ●エス●ミル)。歴史家として、操觚家として、經濟學者として、將た心理學者として更に又役人として及び巧な座談家としてジエームス●ミルはその當時に於て、決して感銘淺きものではなかつた。而も尙、若し彼が向後永久記憶さるゝとすれば——疑もなく彼は記憶せらるゝであらうが——それは主として一個の教へ手として、而も、汎ゆる時代を通じての最も卓拔せる教へ手の一人としてゞある。彼は寸暇無きにも不拘、天分豊かなる彼の子息の全教育を企てた。ジョン●スチユアート●ミルは三歳の時より希臘語の研究を始めた。八歳の頃迄には、ギボンやヒユームの如き英國の著者には少しも觸れず、ゼノフオーン、ヘロドタス、プラトーを多數に讀んだ。八歳にして、羅典語を始め、間もなくヴアージル、ホーレス、リヴイを讀んだ。十歳の時には、高等の數學に進んだ。十二歳にして、論理學及び經濟學の研究を始め、十三歳に達するまでに、當時知られたる汎ゆる經濟理論を會得した。彼が「此の如き早期の且つ高度のやり方」は推稱すべきものではないこと、假令少數の例

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

外的場合に於てすらも、これは、「少年の爛漫さを大人の成熟を以て置きかへることだ」と感ずるやうになつたとしても、殆ど怪しむに足らぬことだ。彼は云つて居る「自分には嘗つて少年の日といふものがなかつた。自分はクリケツトをしたこともなかつた。自然にまかせる方が遙かに良い」と。十四の時、ミルはミサユエル・ベンザム夫妻とその三人の令孃に伴つて南佛蘭西に行つた。そこで一年間を送つた。彼は、佛蘭西語、希臘語、羅典語及び數學に專心し、經濟學者セイに會ひ、外國の政治に興味を感ずることを學び、二國に就て何事かを知る者は唯一國のみについて知る者よりも誤を犯し難しと感ずる樣になつた。一八二三年に彼は印度政廳に奉職し、次第に昇進して一八五六年には年俸二千磅の「檢閲官」に任命された。東印度會社が印度の政權を皇帝に收めた時、ミルは退職し年千五百磅の年金を給せられた。之に先立つて、一八二二年哲學を入念に讀み始め、一八二三年には功利主義者協會を作り、又同年思索的討論會に加入し、こゝで彼は指導者となるに至つた。かくて彼は着々として父の希望を實現して行つた。新哲學的急進主義の花形として、彼はその頃發刊されたウエストミンスター評論の主たる寄稿家であつた。「今や自分は自家の見解なるものを得た。一個の信條、主義、哲學を得た。最も良き意味に於ける宗教を得た」（ミル自叙傳）。

二

此の幸福なる狀態は永く續くべき運命を有たなかつた。一八二六年に彼は自ら夫れを罪惡の確信の下に立つメ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ソヂストになぞらへた所の體驗を嘗めた。彼は云ふ「自分は生き永らふべき望の一つもない樣に思はれた」と。彼は思索的討論會で、モーリスやスターリングに會ひ、之等の人々によつてワーズワアースやコールリッヂ、カーライルやゲーテの著作に近づかせられた。彼は悟つた、理性偏重の父が夢想した所のものより以上のものが、天界及び地上に存在することを。彼はこう感ずる樣になつた「分析的慣習は、情感と德育の根源を絶えまなく枯らすべき蟲である」と。かくして彼とその舊友との間に疎隔の生じたことは怪しむに足らぬ。「彼は誤りなく有力團體の指導者となることを擲つてまでも眞理のための軍勢の一兵卒となることを一層の光榮と考へたのであつた」スターリングはこう云つて居る。ワーズワアースの詩の中に、彼は慰藉を求め之を見出した。其の間、重患に侵され、印度政廳の激務に執掌し、且つは新聞雜誌に幾多の論文を發表する側ら、彼は共の初めの大著述に專念した。ミルの論理學は一八四三年に公刊せられ、忽ちにして、當然なる成功を收めた。是に於てか、世人は始めて、一般科學の方法の明瞭なる分析、殊に實驗的研究方法が係る部分の方法分析が與へられることになつた。グロート曰く「ジョン●ミルの『論理學』は余の藏書中の白眉である」と。コートニーの、此書に對する卓拔なる批評によれば「ミルの形而上學は過度的である」。「彼は或種の教義についてヒュームとスペンサーの中間に位する。他の點に對しては、彼はデカルトとロックを調和せしめんと試みた樣に見える」。彼は共の全生涯を通じて、他人の言を聽かんと勉め、獨斷說を嫌惡し、「他人の見解を極力受容せんとした」。而して彼の好んで用ひたる格言は、眞理は二個の反對說の間に横つて居るといふことであつた。けれども、之等總べての事は、彼の頭腦に對してよりも、その

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

心情に對して世人の信頼を深くした。此の場合にも、他の場合と同じく、彼は二個の反對的立場（此の場合には理想主義的と經驗主義的）を結合せんとし、而もそれ等の調和に失敗してゐるのである。多年ミルの書は諸大學に於て多く讀まれた。その理由の一つは、疑もなく、彼の著作なるものが、鋭敏な學生をして、その著作に多分に含まれてゐる矛盾をば發見せしむる幾多の機會を與ふる所にあつた。昔のウキ　スト（トランプ遊戯の一方法……譯者註）にはこういふことが云はれて居る「疑はしい時は、トランプをリードせよ」と。學生の格言はこうであつた「疑はしい時はミルを攻めてみよ」。

一八四八年に「經濟學原理」が公にせられた。この書は深く期待をかけられたものであつた。蓋しミルは、その幼少時代から經濟學を學んだことが知れ渡つて居り、彼自身、既に經濟學上の重要なる諸論文を書いて居たからである。且つ又當時はシジウイツクが指摘した如く、穀物法が撤廢された後に於て英國は一大隆盛を極めた時代であつた。人々は屢々陷る樣に、原因と結果とを顚倒して考へ、現實が古典學派經濟學者の自由貿易論を實證するものであると考へた。ミルは其の序文の中で云つてゐる「其の目的及び一般思想に於てはアダム・スミスの著作に相通ふが、更に廣汎なる智識と現代の進歩せる思想とに相應すべき書物が、現代經濟學の要求する一種の貢獻であると自分には思はれる」と。寔にミルは、アダム・スミスが十八世紀の爲めになしたる所を、十九世紀の爲めになさんと欲したのであつた。ミルの此の大著の功績に就ては、私達は適當の機會に之を述べやう。先づそれまでは、ジョン・スチユーアート・ミルは要するにアダム・スミスでは無かつたといふ事實に注意を惹くだけに止

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

めておこう。

三

曩に我々は、ミルが外部的影響に對し極めて敏感であつたことを明かにした。彼の父は、彼をば自己自身の型に欲め込み、能ふ限り、感情を捨てゝ、考ふる機械たらしめんと力を竭くした。我々は又、彼の「精神的危機」に於て彼の饑えたる情感が如何に強烈に其の充足を求めたか、そのために、少くとも一時は、彼が獨逸理想主義及びワアーズワアースの詩によつて深く影響せられたことも之を明かにした。我々は今や、彼の心情に深刻なる而も永久的なる印象を殘した他の三つの影響を考ふべき時に到達した。

（一）、一八三七年に、コムトの實證哲學初め二卷が英國に渡つた。而して一八三八年の初頭に、ミルは之を讀み、深き感銘を受けた。一八四一年より四六年にかけて、ミルはコムトと文通した（コムトの私的生活は、其の著書が想像せしめる程高潔なものではなかつた）。「自分は貴方の書を、眞に智的熱情を以て一讀し亦再讀した」。ミルは嘗つて、コムトに言及して曰く「余が最高の尊敬と稱讃とを以て崇敬する現代偉人中の一人である」と。形而上學を嫌つたコムトは、經濟學を以て單なる抽象に過ぎずとなし、斯る科學は不可能である、何者、人間行動の全斑（單なる一斑に非ず）を取扱ふ社會の科學（社會學）は唯一つのみ可能なればであると主張した。加之、社會學に於て、コムトは、結果は、演繹法即ち假定せられたる心理學的原理の推理によつては獲得せられずして、歴

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

史上の一時代を他の時代と比較することによつて得られると力說した。彼に從へば、社會に就ては二個の異なる理論が存在する。一は靜的（スタティック）なものであつて、特定の時代に於ける一定の狀態（例へば英國といふが如き）の上に作用して居る總べての力を愼重に檢覈することに係はる。他は動的（ダイナミック）のものであつて、此の歷史上に於ける特定時代（例へば英國史）の狀態が、前時代の狀態より如何に誘導せられたるかを論ずるものである。コムトの敎義がミルの念入りに敎へ込まれたる敎義と如何に異なるかは一目瞭然であらう。

（二）、影響の第二は、佛蘭西社會主義者サン・シモン、フーリエ、プルードン及び獨逸のラツサレルによつて與へられたものである。政府に關する自由放任論は、大部分、純然たる否定的のものである。卽ち政府の干涉すること少なければ少ない程よろしと爲すものである。然るに、國家を强大にし、少くとも個人を犧牲にして社會を强大にせんとする社會主義は、明らかに自由放任の反對である。且つ又、社會主義者は主張する、舊派經濟學者は「自己自身の狀態を改善」するための個人的努力なるものを極度に重要視するけれども、個人的利得の欲求は決して經濟行動の眞の動機ではないと。かくて、ミルが社會主義的影響をうけた範圍に於ては——固より彼は固有なる意味に於ける社會主義者には決してならなかつたが——彼は、初期の經濟的信仰の基礎から離脫したのであつた。

（三）、然乍、コムトやコールリツヂよりも、又ワアーズワアースや佛蘭西社會主義者よりも遙かに優つて深き影響をミルに及ぼした一人がある。これこそ、遂には彼の夫人となつた一女性である。ミルは一八三一年初めて

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

テーラー夫人に會ひ、忽ちにして兩人の間には暖かき友情關係が生れてきた――この友情關係は、彼の父及び友人達に深甚なる疑惑を惹き起したものであつた。彼は一八五一年に彼女と結婚し、彼女が一八五八年アヴィニョンで他界した後は、彼女の墓近く居らんがために、此の地に居を定めた。彼は常に主張して居つた余の經濟學に對する主要なる貢献は、生産を支配する法則と分配を支配する法則との間の差別を明かにしたことであると。而して此の事は、サン・シモン派の人々から教へられたものではあるが、「余が妻の鼓舞によつて、之が著書を貫流し其の書をして活氣あらしむる所の生命ある原理とならしめられたのである」とミルは自ら談つて居る。『『勞働者の蓋然的將來』なる一章は全く彼女に依るものである』。（ミル原論、第四編第七章なり……譯者註）。一八五七年に至り、東印度會社は消滅せしめられんとするの危險に遭遇した。そこで、一八五六年以降印度政廳の首位に在つたミルは、東印度會社の爲めに、議會に向つて請願書を草案しなければならなかつた。グレー卿によれば此の請願書は、彼が從來目にしたものゝ中で、最も卓越せる國務書類であつたと言はれて居る。

夫人の死後、ミルは彼の大論文「自由論」、「功利主義論」――彼の倫理學說である――「サー・ウイリヤム・ハミルトンの哲學に對する檢討」「議會改革論」及び「代議制體論」を公にした。ミルの「自由論」は個人性のための高遠なる擁護である。多數の彼の書と同じく、「自由論」も亦容易く批評の的となり得るものであり、十九世紀に啓示せられた新らしき眞理に深く思ひを潛めつゝも、結局十八世紀に根を下ろして居る人の著作なのである。彼の「功利主義論」に就ては世評は餘り香ばしくなかつた。ベンザムは、行爲の識別標準が、それによつて作出せらるゝ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

快樂の量にあると主張した。彼は、端的に唱へた「快樂の量が等しければ、留針を作ることゝ、詩を作ることは其の善の程度に於て同一である」と。然るにミルは、快樂は量的にも亦質的にも異ることを力説せんと努力した。さればコートニーは言つて居る「茲でも亦、我々は、ミルがベンザミズムの古き枝に、全く育ちの違ふ花を結び附けんとしてるのを見る」と。三十年前には、英國の大學に於て、倫理學研究の學生にして、先づ此の矛盾せる書の容易き批評より着手せぬものは無い位であつた。

一八六五年から一八六八年まで、ミルは下院議員となつた。彼は其の選擧區の有權者を勸誘したり、選擧に關して何等かの費用を負擔することを拒絶した。彼は最初から、自分の時間を地方的奉仕には竭くさぬことを明言し、その選擧區の如何なる有權者に對しても、決して諂ふことがなかつた。或る集會に於て、ミルは、「貴下は、英國勞働者階級に就て、彼等は他國の勞働者に比すれば僞りを言ふを恥とするけれども、猶概して嘘つきなりと言ひたることありや」と詰問せられた。「余は言つた」此の答は囂々たる拍手を以て迎へられたのであつた。彼の議會生活が短かつたことは遺憾な事であつた。人は皆彼の高潔なる人格を認めた。グラツドストーンはミルを稱して「合理主義の聖者」と言つたが、而も尙「天は明かにミルを討論家又は演説者たらしめんとはしなかつた」と一般に言はれ、グラツドストーンも亦、彼の演説が「彫像から」來る樣に思はれたことを認めざるを得なかつた。一八六七年、ミルは婦人の隷從に關する書を公刊した——彼は熱烈なるフエミニストであつたのだ。一八七三年五月八日にミルは他界した。彼が常に愛誦した一句は「夜が來る。何ぴとも働けなくなる夜が來る」(The night

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

cometh when no man can work.)といふのであつた。彼がその臨終近きを談られた時、靜かに答へた「自分の仕事は爲し終へた」(My work is done)と。彼の死後遺稿二冊が公にせられた。一つは「自叙傳」で、彼の前半生に關する魅惑的記述が盛られ、二は「宗教論文集」で、之に就てはコートニーが巧みにこう言つてる「或る人々には此の書は失望の的となり、他の人々には救ひとなり、總べての人々にとつては一つの驚歎となつた」と。ミルは最後まで矛盾の人であつたのだ。

四

大多數の經濟書は何れも忽ちにして讀者を失つてしまふ。然し又我々は、永く其の生命を支持し行く幾多の書物を指摘することも容易である。此の撰ばれたる一團の中に、ミルの「經濟學原理」も正しく其の地位を見出すものである。之に對しては凡そ三個の理由があげられる。先づ第一はミルが經濟學者として、アダム・スミス以來の能文家であつたこと之である。優れたる達文の士は、その劣れる同輩達よりも、遙かに大なる利益を享けるものだ。多くの場合、否大多數の場合に於て、或る人が人々の記憶に殘るのは、彼が何を言つたかといふことに據るよりも、彼がそれをどんな風に言つたかと言ふことによるものである。ミルを以て大思想家なりと主張する人は殆んど無いかも知れないが、偉大なる說明者であることは何びとも否定することを得ない。彼の堂々たる句讀彼の淸澄なる國語は、正しき文章を愛する總べての人に愉悅を與へ、又向後永く之を與へるものであらう。彼の

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

見解に就ては殆んど之を理解せず、又共鳴もしなかつたかも知れぬけれども、勞働者達は、恰も後に彼等が其の盟友としてアルフレッド・マーシャルを有つてると感ずる樣になつた如く、その溫情ある友としてジョン・スチュアート・ミルを有つてると感じたのであつた。ミルの同情心と熱情とは、彼の思想の力よりも强かつた。サー・ウイリアム・アッシュレーは云ふ「これは高き水準に立つて思索し、遂行せしめられ、崇高なる精神を呼吸して居る所の大論文である」と。ミルが書いた總べてのものと同じく、之は、少くとも一時代を深く影響したものであつた。思想家としてのミルの弱點を最もよく自覺してる人々さへも、コートニーと共に次の樣に云ひ得るのである「論理學に於て、倫理學に於て、政治學に於て、我等はミルの躍進により、我等自身を成長せしめたのだ」と。

既に明らかにせる如く、アダム・スミスは「國富論」中に、彼以前の汎ゆる經濟論を要約し、以てこれ等を無用に歸せしめたが、曩にも云へる如くミルは又、アダム・スミスが十八世紀になせる所を十九世紀になさんと克明に企てたものであり、而してミルは遂にアダム・スミスたり得なかつたことは我々の既に言及した所である。それにも不拘、ミルの「經濟學原理」には彼に先立つ人々に依つて爲されたる著作が、巧みに要約せられてる事實は嚴として動かされない。彼の智識は廣汎に渡り、その公正感は嚴然たるものあり、清澄なる國語支配力は極めて深かつたが故に、彼は最も稱讃すべき解說者となつて居る。例へば、多くの人々は、リカードーそのものを讀むよりも、ミルのリカードー紹述を讀む方が、容易く、且つ理解し易いことを知る。ナツソー・シーニョアがリカードーに對して「嘗つて學問的優位（フィロソフィカル・エミネンス）を占めた人の中で、最も不正確なる著者」と云つた攻難の中に、若干の眞

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

理の在ることを憶ひ起すならば、右の叙述は敢て之を怪しむに足らぬのである。この事は又他の事實に我々の注意を向けさせる。即ち昔の諸經濟學者の學說に關するミルの解說は、それ等が初めに發表せられた形式よりも遙かに優つて衆目を惹きつけるといふことである。ミルは、自由貿易及びレツセ・フエールが永久の泰山として不拔に建說せられたと人々に思はれたる時代、又英國の政治家は、國民に向つて、保護主義は啻に死せるのみならず、地獄に陷りたるものなりと斷言せる時代、且つ又佛國の一碩學は、等しくきつぱりと、尙且つよろこばし氣に「今日社會主義に就て云々するは、弔辭を叙ぶるが如し」と云ひ得た時代、我々はかくの如き獨斷的時代にミルが生活したことを想ひ起す時、右の如き確信、即ち經濟學上の主要問題は解決せられたりとの確信が、ミルに於ては甚だしく少いことを感ずるのである。尤も彼は價値論を叙ぶるに當り、誤つて「幸にも、價値の法則に關しては、現在及び將來の論者が開拓すべき餘地は何物もなし。此れに關する理論は完備せり」との失言をなした。然し、時折は「法王的(ポンティフィカル)」(マーシャルの語)に又「權柄的(マジステリアル)」になり得たが、一般的には、甚だ之と異なる色調を以て書いて居る。彼の心に溢れたる、不幸なる者への憐憫、不遇なる男女への同情は、殆んど一頁毎に歷然たるものがある。惟ふに、彼が、ベンザムの敎義を改修せんとし、快樂の質も亦其の量と同じく考慮せらるべきであると言つて之を破壞した如く、彼は前人達の冷酷な經濟理論に、時には倫理的、時には感情的變革を導入し、斯くて自ら解說せんとした先學者達の敎義をば、他の人々にも劣らぬ程に之を不信望たらしめたのである。然乍、このことが眞實なりや否やに就ては、我等はサー・ウイリアム・アツシユレイの言葉に信ずべきものあるを感ずる。曰

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

く、ミルは舊派經濟理論の實體は其のまゝ之を保持してゐたけれども、云はゞ、新らしき環境を以て之を圍繞せしめんと欲したのであつたと。往々にして我等は、リカードの苛酷なるに不快を催すことがあり、之はマルサスにすらあるが、ミルに在つては其の冷酷なるが故に不快となることは決してない。彼の弱點は實にそれとは反對の點に存するのである。彼は幾分センティメンタリストなのである。それは兎も角、「古典學派の教說」に關する論述の中で、ミルよりも尙アトラクティブなものゝないことは事實である。

五

ヘーゲルの「歷史哲學」中に達意の一節ありて云ふ「ミネルヴァの梟は、夕暗が訪れるまでは飛び立たない」と。一個の大哲學者が、宇宙を說明すべき思想體系を構成した時には、それまでに、世界は前進して、彼の理論を後ろに置き去りにしてしまつた。「勝利を獲得した體系は殆ど存在しないのである」。この事は、他の場合に比し、經濟學に於て最も著るしい。生產方法、交通運輸の態樣、政府の國內的干涉、國際關係等其他經濟學者が考慮せねばならぬ百般の事項は不斷に變化して居る。今日の經濟社會を如何に巧妙に叙述し、分析し、說明するとしてもその叙述、分析、說明は何れも立ち所に舊式のものになつてしまふ。時代が變り、それに伴つて、經濟學も他の事物と同樣に變化して行く。されば、近き將來に、第一流の經濟學者が經濟科學の全體を取扱つた論文を書くといふことは殆ど考へられないことである。少數の教科書は絕えず印刷せられて行くであらうが、教科書は論文

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ではない。思ふにマーシャルの「經濟學原理」のみが唯一のものであらう。經濟學は餘りにも廣汎なる課題なるが故に、一個人が其の全般を取扱はんとすることは出來ない。一人は一個の主題を把えて、その研究を錄し、他の人は又經濟學の他の部問を取扱ふ。極く少數の才能ある人のみが全體として此の科學を取扱ふであらう。

然れども小論文、特殊論文等は、それとして價値あるものであるけれども、之に甘んじられるものではない。我等は組織的取扱ひを熱望する。而してミルは實に夫れを我等に提供しくれるものである。彼の「經濟學原理」の中に、我等は全領域の鳥瞰圖が求め得られる。我々は——今日我等が陷り勝ちな——個々の樹木を見て、森林を見失ふ樣なことがないのである。

かくて、コッサの言葉を以てすれば「ミルの『經濟學原理』は古典學派の學說の最良なる要約、即ち最も遺憾なき、最も完備せる而も最も正確なる解說」と云はれる。されば我等の先づ爲すべき所は、その學說が如何なるものなりやを質す事に在る。之をなすに當り、我等はジード教授の說明に從ふに如くはない。ジードは獨特の明快さを以て、之を七項に要約した。その各項を舊派經濟學者は自然法と看做したのである。

一、自利心の原則であつて、之は人も知る如くアダム・スミスに依り極めて明瞭に說かれたものである。「我等が我等の食事を得るのは、肉屋や酒屋や麵麭屋の慈善からではなくて、彼等自身の利益を考へることからである」

二、自由競爭の原則であつて、「競爭の制限は何れも害惡である……競爭の擴張は總べて、常に窮局的利益である」

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

三、第三にはマルサスに依り公表せられたる人口の原理である。恐らくマルサスは、ミル以上に熱烈なる祖述者は遂に持たなかつた。去年、ミルはマルサス主義者であつて、新マルサス主義者ではなかつた事を明確に了解しておかねばならぬ。彼はマルサス以上に禁慾論者であり、例へば、結婚せる二人の間にも自制なかるべからざることを極論した。ベーン教授は云つて居る「ミルは純粋な精神的愛情を餘りにも高く評價したが、肉體的情感は餘りにも低く評價し過ぎたとは多くの人々の意見である」と。

四、次には、需要供給の原則であつて、之に依れば、價格は需要に正比例して變化し、供給に反比例して變化する。

五、賃銀の原則、ラッサルレの所謂「鐵則」である。勞働の價格は其の勞働を作出する費用に係はる。而して賃銀が支拂はるゝ源泉となる額は嚴として制限せられて居る。

六、最に觀察したる如く（原著者は本書第三章にてリカードーを論じたればなり……譯者補註）リカードーの體系の基底には、地代の原則が横つて居る。ミルは、之を擴張して才能（アビリティ）をも包含せしめた。

七、最後に、國際的交易の原則であつて、之はリカードが始めに提唱したのであつた。コートニーの指摘する所によれば、ミルはリカードーの理論を發展させ、骨骼に肉をつけ、極端に抽象的なる原理をば、具體的表現に飜案し、日常耳目にする事實を以て之を說明したものである。

外國貿易論に於て、ミルの書は其の先人のなせる所に改修を施して居る。依つて我々は、その他の部間に就て

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

彼が何等か確實なる貢献をなせりや否やを問はねばならぬ。之に對する答は凡そ次の如し。彼は需要供給論の論議に於て、價格は、供給せられたる量が、需要せらるゝ量に等しき點に決定せらるゝことの理論を導き入れた。換言すれば、彼は均衡理論を導き入れた。凡そ價値には二種類ある。一は不定なる價値（(Instable value) で、之は供給及び需要の變化に依存する。二は永久的、自然的、或は正常的價値(Permanent, natural or normal value) で、之は生産費によつて支配せらるゝ。例へば貨幣は二個の要因、即ち（イ）流通量と（ロ）交換のために需要される數量とによつて決定せらるゝ一時的價値を有する。然乍、更に貨幣は總べての動揺が停止せる時に達する永久的價値を有する。之は貴金屬を採掘する費用によつて決定せらるゝものである。第三にミルは、彼が賃銀基金説に就きて云つた所を撤回して、完全なる變説を遂行した。然しマーシャルは、ミルが賃銀基金説に代へて提出した賃銀理論なるものは甚だしく不完全なものなることを示して居る。「ミルは價値論に到達せぬ内に賃銀を論ぜんと企てた。斯くて彼は、不完全なる説明に陷り、第四編に於ける修正も一般に注意を惹かなかつた。賃銀を論ずるに當り、經濟學に多くの人間的色調を入れんとする熱心の餘り、一層よき判斷が得られず、不完全なる分析を以て進んで行かねばならなかつた。蓋し、彼が需要供給の説明に先立つてその賃銀論の主要理論を提出したことは、彼が是れを完全に取扱ふべき總べての機會を斷ち切つたことゝなつたからである」（マーシャル、原理、八二四頁）。

一八三一年ヘーリベリーのリチヤード・ジョンズ（一七九〇——一八五五）は「富の分配と税源に關する研究」を

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

公刊し其の中でリカードーを批評した。彼は、獨り英國だけの狀態から推論することは、正しからざる結論に達すべき重大なる危險を冒すことゝなると主張し、夫々の國々を廣く觀察することによつてのみ、右の謬れる結論は避くることを得ると論じた。換言すれば、彼はリカードーの演繹方法を攻擊したのであつた。第二に彼は主張して言ふ、事實に於て競爭は地代を決定すべき唯一の要因でないと。地代は、我等が現實の生活に於て知る如く屢々慣習によつて決定せられる。イングラムは言ふ、ミルは此の書物を讀んだが「その功績は之をかすかに認めたに過ぎなかつた」と。その當否は別として、ミルもジョーンズの如く、農業地代を Serf-rent, metayer-rent, ryot-rent, cottier-rent, に分類したことは爭はれぬ事實である。

言葉を換へて云へば、彼は現實生活の領域に於ては、經濟理論の領域に於けると異つて、地代は單に競爭のみによらず、主として慣習によつて影響されることを認めた。「此認容は土地貸借問題に、全く新らたなる光明を與へ、地主對小作人の契約に法律が容喙し得るとの基礎を明白に提供したものである」と。之ケルンズの言である。ミルは、彼が經濟理論に竭くした最も重要なる貢獻と看做すものは何であるかに就て、我等に些の疑問も殘さなかつた。彼は生產を支配する法則と分配を支配する法則との間に確固不拔なる境界線を引かんと努力した。ミルにとつては、前者は「對象の性質に依存する眞の自然法」であり、後者は「一定の條件の下に人間意志に依存するものなのである」。「經濟學原理」は、先人達が假定した諸條件の下で、之等の原因の作用を科學的に認識せんと志した點に於て、先人の何びとにも負ふものではない。それは、之等の諸條件を最終のものとして取扱はざ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ることの一典型を示し居るのである。自然の必然に依らずして、現存社會組織と結合せる必然に依る所の經濟上の原則は、之、單に一時的なるものであり、社會進歩によつて甚だしく變化され勝ちなものとして取扱つて居るのである。「定に、余は此の見解を部分的にはサン・シモン派の考察によつて、余に呼び起された思想から教へられたが、余が妻の鼓舞によつて、余の書を貫流し、活氣づける生ける原理たらしめられた。」換言すれば、生産は不易の原則によつて支配せられ、分配は社會内に繼起する變化によつて變更せらるゝことを、ミルは信じたのであつた。茲にも亦、他の場合と同じく、ミルの心裡に、舊き力と新らしき力との戰ひが戰はれて居る。リカードー對コムト、或は若し諸君が欲するならばリカードー對ミル夫人が、支配權を爭ひ、而も何れもが完全なる勝利を獲て居ないのである。生産と分配との此の人爲的區別が、何等實現方法を提供して居ないことは明白である。我々は之が實現のために僅かに、工場法、最低賃銀法案等を想ひ起すに止らねばならぬ。

最後に、ミルは「經濟の術」が直接に「經濟科學」から誘導せられぬことを主張する。サー・ウイリアム・アッシユレーが示せる如く、彼は「科學なる語を抽象的論議に限定し、之が實際狀態に對する關係の決定は、彼の所謂『推測の機敏』に任せた。」

斯くて、我々は次の事を知る。ミルの著述はヴイクトリヤ朝時代を描く一幅の繪であり、その中には十八世紀の雰圍氣が多分に盛られてあることを。「コムト、社會主義者、及び輿論の大勢の結合の下に、彼は、機械的要素に反して經濟學に於ける人間的要素を、顯著ならしめんと志したのであつた」（マーシヤル）。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

彼が自己の心情に斯くも強く訴へたる新らしき思想を以て、舊派經濟理論を融和し得なかつたことは疑の存しない所である。然し彼の企畫が、其の心境の正廉と、性格の崇高とに信賴を深めたことは歴然として居る。彼の失敗はそのことが一種の成功であつた。蓋し、如何なる場合にも、それあるが故に、ミルと見解を異にする人々をして、他の方法に依り、舊き狀態と新らしき問題の二者に直面せんと奮起せしめたからである。

（ミルの項終り）